

# カフカ作品における「唐突発言」 『不幸であること』における幽霊との会話の分析

著者	西嶋 義憲
雑誌名	言語文化論叢
巻	25
ページ	127-148
発行年	2021-03-30
URL	<a href="http://doi.org/10.24517/00061567">http://doi.org/10.24517/00061567</a>



# カフカ作品における「唐突発言」

——『不幸であること』における幽霊との会話の分析——

西 嶋 義 憲

## 0. はじめに

カフカ作品における登場人物間の会話の中には、日常的なそれとかなり異なり、ある種の奇妙さが感じられるものがある。その奇妙さについてはいろいろな観点から分析が可能であろう。本稿では、小品集『観察』(*Betrachtung*)に収められている『不幸であること』(*Unglücklichsein*)における一人称の主人公(ich)と幽霊(*Gespent*)との会話を取り上げる。そこでは、「とにかく、あなたが私を脅したことは忘れません」という、何の脈絡もなく唐突に発せられたように見える発言(これを本稿では「唐突発言」(*unerwartete Äußerung*)と呼ぶ)が興味を引く。この発言を契機に会話は急展開することになるからである。本稿では、この発話が発せられる背景を分析し、幽霊の性別について考察する。

## 1. 問題の所在

### 1.1. カフカ作品における対話の「歪み」

カフカ作品を他の作家作品から際立たせている特徴の一つは、登場人物間の対話であろう(Krusche 1974)。作品内で交わされる対話は、日常的なそれとは異なり、奇妙なやり取りに見えることが多い。このような点に着目し、これまでさまざまな対話分析が試みられてきた。たとえば、Hess-Lüttich (1979)は、話

者間の誤解とそれによって引き起こされるコミュニケーションの齟齬を問題にしている。また、三谷(1986)は、カフカ作品の解釈の多様性は対話の機能と関係している点に着目している。しかしながら、カフカ作品内の対話は、このような誤解や解釈の多様性といった複数の意味世界に関わる側面からだけでは十分に説明できないものもある。たとえば、言語表現によって描かれるはずの意味世界の構築を積極的に拒否しているような対話がある。そこでは、対話という日常的なやり取りの形式を用いて、それによって構築されるはずの意味世界が拒否されるという非日常的なコミュニケーションが見られる。このような対話の奇妙な展開が、カフカ作品の特徴の一つになっているように思われる（西嶋2004）。

この意味世界構築における「奇妙さ」について、筆者は、これまで複数の作品を分析することによって指摘してきた（西嶋 1990; 2000; 2001a; 2001b）。分析の結果、テキスト内言語相互行為レベルでは結束性（coherence）の極めて高い言語行為連鎖が認められるが、意味論レベルでは整合的でない事態の叙述によって統一的な意味世界が構築されえず、結束性がきわめて低いことが明らかになった。つまり、テキストを構成する二つのレベルについて、相互行為の形式面に関してはやり取りが正常に機能しているが、意味世界に関してはその構築が拒絶されるという構造が認められるのである。この二つのレベルの間に見られる結束性の度合いのアンバランスが「歪み」となり、既述の「奇妙さ」を形成することになるわけである。

## 1.2. 「奇妙さ」を生み出す技法としてのズラシ

このような「歪み」の他に、いくつかの技法がカフカ作品の対話で確認されている。対話の展開に関する例を紹介しよう。たとえば、否定行為あるいは質問行為が繰り返される場合があるが、そこでは、結果としていつの間にかテーマや次元のズラシなどが引き起こされている。同一行為の繰り返しにより、通常の形式に慣らしておき、結果としてその形式の過剰な展開により整合性のある意味世界の構築を妨げるという技法である。たとえば、『国道の子供たち』（*Kinder auf der Landstraße*）では、質問行為の繰り返しの中で、表層上のテーマ

が「連中」(Leute) から「ばかものたち」(Narren) へと変化している。これにより、意味論の焦点が拡散し、意味論レベルでの整合性が確保できなくなっている(西嶋 2001b)。同じく、同一行為の繰り返しという技法によって、次元間で移動が起きる場合がある。たとえば、『木々』(Die Bäume) では、対話ではないが、否定行為の繰り返しにより「主観世界」から「客観世界」へと(西嶋 1990)、また、『比喩について』(Von den Gleichnissen) では質問行為の繰り返しにより言明内容とメタ表現との間で(西嶋 2000)、さらに泉(Brunnen)がテーマとなっている断片テキストでは発話レベルから語りレベルへと(西嶋 2001a)、それぞれ移動が起きている。その他の技法として、先ほどの断片テキストでは、登場人物がまったく予想だにしていなかった「声」による介入があり、それによって対話が展開されることになる(西嶋 2001a)。その「声」は、今度は語りの次元にまで進出するという特異な展開技法が確認された。こういった「歪み」やさまざまな技法という観点から、カフカ作品内の対話の特殊性の一端を適切に説明することが可能になった。

### 1.3. 「お見通し発言」

ところで、こういったズラシの技法とは別に、カフカ作品内の対話には、ある登場人物の思考内容や意志などを、語り手以外の他の登場人物が断定的に言明する例が散見される。語りにおいては、通常、ある登場人物の内面世界は基本的に語り手が描写する(Stanzel 1985)。しかし、カフカ作品には、このルールに違反し、二人称によって指示される対話相手の思考内容を他の登場人物が断定的に明言する例が確認されている。このような発話を、筆者は「お見通し発言」(durchschauende Äußerung)と名付けた(西嶋 2004; 2016; Nishijima 2005)。この発話の特徴としては、主語が二人称で、述語は *denken* や *glauben* などの思考動詞、もしくは意志を表現する話法の助動詞 *wollen* の現在形が使用される点が挙げられる。そして、その機能にはいくつかあり、その代表例の一つは、相手の内面世界を断定的に相手に突きつけることで、発話者の聞き手に対する精神的優位性を確保するというものである。また、相手の内面を理解していることから、相手への深い共感を表すこともある。さらには、意識していなかった

ことを指摘され、それによって話が展開する例もある（西嶋 2016）<sup>1</sup>。

このような「お見通し発言」は、登場人物の考えていることを暴露することになるので、語り手の役割の一部をになっているとさえ言える。とりわけ「一意性」（Einsinnigkeit）<sup>2</sup>と呼ばれる技法により、語りの世界が制約を受ける傾向にあるカフカ作品においては、「お見通し発言」の役割は大きいと思われる<sup>3</sup>。

## 1. 4. 問題設定

### 1. 4. 1. 予期せぬ発話としての「お見通し発言」

上記の「お見通し発言」の機能の一つに、会話相手が予期していなかったことを指摘し、それによって話が展開するものがあると述べた。その具体例をみてみよう。

次の断片テキストは、相手の無意識的な意志や願望を断定的に提示し、それを認めさせる技法の実験的記述と解釈できる。テキスト原文を挙げる。各文には便宜的に話者を A と B に分け、番号を付した。

- ① A: „Auf diesem Stück gekrümmten Wurzelholzes willst Du jetzt Flöte spielen?“
- ② B: „Ich hätte nicht daran gedacht, nur weil Du es erwartest, will ich es tun.“
- ③ A: „Ich erwarte es?“
- ④ B: „Ja, denn im Anblick meiner Hände sagst Du Dir, daß kein Holz widerstehen kann, nach meinem Willen zu tönen.“
- ⑤ A: „Du hast Recht.“ (Konvolut 1920, p. 358)<sup>4</sup>

<sup>1</sup> それ以外の観点からの分析として、Nishijima (2015)はドイツ語による「お見通し発言」を日本語に訳す際の工夫について考察し、Nishijima (2019)は「お見通し発言」を相互行為における言葉遊びという観点から分析を試みている。

<sup>2</sup> „Einsinnigkeit“とは、Beißner (1952)が提唱した概念であるが、これは語りで提示される事態が、特定の登場人物（物語がその人物の目を通して見られるという意味での視点人物）の認知（知覚や視点）に限定される描写方法のことである。

<sup>3</sup> これについては、別稿を準備中である。

<sup>4</sup> *Konvolut 1920*. Franz Kafka: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Herausgegeben von J. Schillenmeit. Kritische Ausgabe, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002, 223-362.

この対話の展開をまとめると次のようになる。①で A は、二人称代名詞 *du* で指示される相手 B に対して、「笛をふく」(*Flöte spielen*) という行為の意志の有無を問う。①の前には先行する発話がないので、この発話は唐突に響く。それが唐突であったことは、次の応答発話②からもわかる。②で B はまず、その指摘された意志の内容がもともと自分になく、意外であることを表明する(前半部)。ところが、つぎに [B による「笛を吹く」(*Flöte spielen*)] を A が期待しているということを根拠として提示し(後半部)、それに基づいて B は自分の意志として「笛を吹く」(*Flöte spielen*) ことを表明する。この部分も一方的である。何の脈絡もなく相手の私的領域にかかわる期待に言及しているからである。その唐突さは、③のほぼ鸚鵡返しの反応から窺うことができる。③で A は、[B による「笛を吹く」(*Flöte spielen*)] を A が期待しているという B の指摘を A は疑問に付す。④で B は、その疑問に対して、その根拠を具体的に提示する。それは、どんな木片も B の意志どおり音を出せると A が考えていると断定する内容である。これも相手の私的領域に属する思考内容を述べている。ところが、⑤で A は、B の根拠提示を承認し、そこで対話は終わる。したがって、この対話の特徴は、相手の思考内容を先取りして提示し、それによって相手の反応を引き出すというパタンの繰り返しにあると考えられる。

#### 1.4.2. 「唐突発言」

この種の「お見通し発言」と同じような機能をもつ発話が、小品集『観察』(*Betrachtung*) に収められている『不幸であること』(*Unglücklichsein*<sup>5</sup>)においても観察された。そこでは子供の幽霊が登場し、一人称の主人公と会話する<sup>6</sup>。その会話の途中で唐突に「とにかく、あなたが私を脅したことは忘れません」という発言がなされる。相手が予想だにしていなかったことを発言し、その相手を

<sup>5</sup> Franz Kafka: *Drucke zu Lebzeiten*. Hrsg. von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Kritische Ausgabe, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002, 33-40.

<sup>6</sup> この幽霊が何者なのかについてはさまざまな説が提出されている。たとえば、古庄(1978)は「自分の分身」と述べ (p. 37)、井上(2003)は主人公の「分身・第二自我」と解釈している (p. 54)。これについては、3.5.節で再び触れることになる。

委縮・混乱させ、結果的に相手にそれを認めさせる。この発話は、対人関係において自分を優位に立たせるためになされたものと考えることができる。その意味で、既述の「お見通し発言」の一つの機能と関係していると言ってよからう。

しかしながら、その種の「お見通し発言」と異なり、相手の思考内容などの内面世界を実際に指摘しているわけではない。脅した内容も明らかにされていない。では、この発言の背景には何があるのだろうか。この奇妙な「唐突発言」(unerwartete Äußerung) とでも呼ぶべき発言について正面から論じた研究はないように思われる。そこで、本稿では、この「唐突発言」がなされた背景を、後段のアパートの他の間借り人との会話と関連付けて考察する。

## 2. 幽霊との会話

幽霊としての子供との会話は、多少ぎくしゃくしながらも、ある段階までは友好的に進行していく。しかし、幽霊が唐突に「とにかく、あなたが私を脅したことは忘れません」 („Immerhin werde ich mir merken, daß Sie mir schon gedroht haben.“) という発言をした後から、会話のやりとりが陰悪になる。会話開始からこの時点にいたる会話の進行をいくつかの段階に分けて観察してみよう。

### 2.1. 「脅し」の指摘による状況の強制的変更

この物語の主人公は一人称単数形の *ich* で表される人物である。この人物は11月の夕暮れ時に自分の部屋の中を何やらあわただしく動き回っている。その時、小さな幽霊として (Als kleines Gespenst) 子供 (Kind) が一人、暗い廊下から入ってくる。会話は、主人公の „Guten Tag“ によって開始されるが、それに対して子供は何の反応もしない。一般に、会話の開始の挨拶表現は同じ表現が繰り返されるのが普通である。 „Guten Tag“ と言われたら、相手に対して同じく „Guten Tag“ で返すのが期待される。しかし、この会話ではそのような応答が見られない。これは、会話が後段になって正常に進行しなくなることを予見させる。

このように、会話を始めるために主人公は挨拶をするが、相手は答えない。そこで、主人公は会話の戦略を変更し、幽霊の訪問しようとしている相手が本

当に自分なのかどうかを確かめることにする。その確認が終わると、幽霊に部屋の中に入るよう勧め、「ドア閉め」をめぐる会話がひとしきりなされることになる。その部分を引用しよう。

„Dann kommen Sie weiter ins Zimmer herein, ich möchte die Tür schließen.“

„Die Tür habe ich jetzt gerade geschlossen. Machen Sie sich keine Mühe. Beruhigen Sie sich überhaupt.“

„Reden Sie nicht von Mühe. Aber auf diesem Gange wohnt eine Menge Leute, alle sind natürlich meine Bekannten; die meisten kommen jetzt aus den Geschäften; wenn sie in einem Zimmer reden hören, glauben sie einfach das Recht zu haben, aufzumachen und nachzuschauen, was los ist. Es ist einmal schon so. Diese Leute haben die tägliche Arbeit hinter sich; wem würden sie sich in der provisorischen Abendfreiheit unterwerfen! Übrigens wissen Sie es ja auch. Lassen Sie mich die Türe schließen.“

„Ja was ist denn? Was haben Sie? Meinetwegen kann das ganze Haus hereinkommen. Und dann noch einmal: Ich habe die Türe schon geschlossen, glauben Sie denn, nur Sie können die Türe schließen? Ich habe sogar mit dem Schlüssel zugesperrt.“

*(Drucke zu Lebzeiten, p. 35)*

具体的には、「それならばどうぞ中にお入りください。ドアを閉めたいんです。」(„Dann kommen Sie weiter ins Zimmer herein, ich möchte die Tür schließen.“) という主人公の発言に対して、「ドアは今ちょうど閉めたところです。お気遣いなく。とにかく落ち着いてください」(„Die Tür habe ich jetzt gerade geschlossen. Machen Sie sich keine Mühe. Beruhigen Sie sich überhaupt.“) と幽霊は応じる。ドアを閉める必要がある理由としてアパートの住人が好奇心をもっているからだと述べた後、「私にドアを閉めさせてください」(„Lassen Sie mich die Türe schließen.“) とドアを自分で閉めたがる。それに対して幽霊は、「で、それならもう一度言いましょう。ドアはすでに閉めました。あなたしかドアを閉めることができないと



でも思っているのですか。私は鍵さえもかけましたよ」 („Und dann noch einmal: Ich habe die Türe schon schließen, glauben Sie denn, nur Sie können die Türe schließen? Ich habe sogar mit dem Schlüssel zugesperrt.“) と言われてしまう。主人公は「なら結構です。それ以上のことは望んでいません。鍵はかける必要はなかったでしょうがね。」 („Dann ist gut. Mehr will ich ja nicht. Mit dem Schlüssel hätten Sie gar nicht zusperren müssen.“) と述べて、ドア閉めへの執着を終了する。

このように、幽霊の応答をあたかも聞いていないかのような、ちぐはぐなやり取りを続けた後、主人公は相手を客として迎えることを明確に宣言する。しかし、そのような宣言について、「こんなことまで言う必要ありますか。私のことをそんなに知らないのですか」 („Muß ich das erst sagen? Kennen Sie mich so schlecht?“) と問いかけ、そのようなことを言う必要がなかったことを、互いに知らないわけではないことを根拠に確認しようとする。それに対して幽霊は、「自分は子供です。なぜ私にそれほどまで仰々しくするのでしょうか」 („Ich bin ein Kind; warum soviel Umstände mit mir machen?“) と問いかける。この発言の前提には、子供としての自分に対しては仰々しい気遣いは必要ないと了解されていることがわかる。それに対して、「大したことではありません。もちろん、あなたは子供です。しかし、それほど小さいというわけではありません。もう十分に大人です。もしあなたが女の子だったら、そう簡単に私と一緒に一つの部屋に閉じこもってはいけませんでしょう」 („So schlimm ist es nicht. Natürlich, ein Kind. Aber gar so klein sind Sie nicht. Sie sind schon ganz erwachsen. Wenn Sie ein Mädchen wären, dürften Sie sich nicht so einfach mit mir in einem Zimmer einsperren.“) というように、子供が自分は子供だから仰々しいふるまいは不要だとの訴えに対して、気遣いは大したことではないと伝え、さらに、もう十分に大人であることを指摘する。それに付け加えて、女性だったら、一つの部屋に私と一緒にいてはいけないとも述べる。その後の幽霊の発話を引用する。

„Dartüber müssen wir uns keine Sorge machen. Ich wollte nur sagen: Daß ich Sie so gut kenne, schützt mich wenig, es enthebt Sie nur der Anstrengung, mir etwas vorzulügen. Trotzdem aber machen Sie mir Komplimente. Lassen Sie das, ich

fordere Sie auf, lassen Sie das. Dazu kommt, daß ich Sie nicht überall und immerfort kenne, gar bei dieser Finsternis. Es wäre viel besser, wenn Sie Licht machen ließen. Nein, lieber nicht. Immerhin werde ich mir merken, daß Sie mir schon gedroht haben.“

(*Drucke zu Lebzeiten*, p. 36)

「それについて自分たちは心配する必要がありませんね」 („Darüber müssen wir uns keine Sorge machen.“) と一つの部屋に一緒にいることが問題ないことを確認した後、子供は唐突に「私がただ言いたいのは、私があなたのことをとてもよく知っているということが私を守ることにはほとんどなく、むしろ、あなたを、私に何かをもっともらしく言う労力から解放させることになる、ということですよ」 („Ich wollte nur sagen: Daß ich Sie so gut kenne, schützt mich wenig, es enthebt Sie nur der Anstrengung, mir etwas vorzulügen.“) と、自分が相手のことをよく知っていたとしても、それが自分を守ることにはならず、相手からの気遣いの言葉を不要にするだけであることを指摘する。そして、続けて「にもかかわらず、あなたは私にお愛想を言う。そんなことはやめてください、要求します、そんなことはやめてください」 („Trotzdem aber machen Sie mir Komplimente. Lassen Sie das, ich fordere Sie auf, lassen Sie das.“) と、気を遣ってお愛想を言うことをやめるよう要請している。そして、それに付け加えて、どこでもいつまでも知っているというわけではないことを指摘し、「さらにこのような暗がりでは」 („gar bei dieser Finsternis“) と強調する。そこで灯りをつけるように言おうとするが、「いや、やめておきましょう」 („Nein, lieber nicht.“) と引つ込める。

このターンの最後で、唐突に「とにかく、あなたが私を脅したことは忘れません」 („Immerhin werde ich mir merken, daß Sie mir schon gedroht haben.“) と述べるが、このドイツ語文は、*merken* という事実動詞により、脅したということをして「事実」として取り上げ、それを覚えておこうと明言している<sup>7</sup>。このように主人

<sup>7</sup> この発話に *schon* という表現が使われている点に着目しよう。これは、期待よりも早い段階を表現する副詞というよりも、むしろ *gedroht haben* という行為の強調を表す心態詞と考えるべきであろう。

公が脅したという「事実」を指摘し、それを覚えておくと述べている。

## 2.2. 「脅し」をめぐる

この「脅し」を指摘した発言に対して、主人公は次のように応答する。

„Wie? Ich hätte Ihnen gedroht? Aber ich bitte Sie. Ich bin ja so froh, daß Sie endlich hier sind. Ich sage ‚endlich‘, weil es schon so spät ist. Es ist mir unbegreiflich, warum Sie so spät gekommen sind. Da ist es möglich, daß ich in der Freude so durcheinander gesprochen habe und daß Sie es gerade so verstanden haben. Daß ich so gesprochen habe, gebe ich zehnmal zu, ja ich habe Ihnen mit Allem gedroht, was Sie wollen. —Nur keinen Streit, um Himmelswillen! —Aber wie konnten Sie es glauben? Wie konnten Sie mich so kränken? Warum wollen Sie mir mit aller Gewalt dieses kleine Weilchen Ihres Hierseins verderben? Ein fremder Mensch wäre entgegenkommender als Sie.“

(*Drucke zu Lebzeiten*, pp. 36-37)

相手の「脅し」を指摘する幽霊の発言に対して、幽霊と会話している主人公の「私」は、「え？私があなたを脅したというのですか？」(„Wie? Ich hätte Ihnen gedroht?“)と驚いて見せる。「脅し」などするはずがないことの根拠として、「自分はあなたがやっところに来てくれてとてもうれしいからです」(„Ich bin ja so froh, daß Sie endlich hier sind.“)と理由を挙げている。その理由の挙げ方についてあれこれ言い訳をして、それを基に、「私はうれしくてこのように混乱した話し方をし、それをあなたが脅しと理解した可能性はあります」(„Da ist es möglich, daß ich in der Freude so durcheinander gesprochen habe und daß Sie es gerade so verstanden haben.“)というように誤解によって「脅し」が生じた可能性を指摘する。しかし、その後、奇妙なことに、結局、「私がそのように話したことを10回認めましょう。そうです、私はあなたを、あなたが望むものすべてで脅しました。」(„Daß ich so gesprochen habe, gebe ich zehnmal zu, ja ich habe Ihnen mit Allem gedroht, was Sie wollen.“)というように、相手の誤解ではなく、実際に「脅した」

と述べ、相手の主張を全面的に認める。

しかし、実際に脅したのだろうか。「脅し」を認めたにせよ、それに気づいていなかったということは、無意識に発した何らかの発話がそのように理解されたということになる。その「脅し」と理解された発話は、どの場面で発せられたものなのだろうか。これまでのテキストからはその「脅し」を明確に理解することが難しい。この点については、後で解釈を試みる。

ところで、この「脅し」の言及とその承認の後から、二人の関係は険悪になり、次第にその対立が先鋭化してくる。喧嘩はしないようにしようと確認したのち、主人公は「どうしてそう思えたのですか。どうして私をそのように傷つけることができたのですか。なぜあなたはあなたの束の間の滞在を全力で台無しにしようとするのですか」 („Wie konnten Sie es glauben? Wie konnten Sie mich so kränken? Warum wollen Sie mit aller Gewalt dieses kleine Weilchen Ihres Hierseins verderen?“) と詰問する。そして「脅し」を訴える子供の発言に対して「見も知らぬ人だってあなたよりは好意的でしょうに」 („Ein fremder Mensch wäre entgegenkommender als Sie.“) と相手の友好的でない態度を批判する。それに対する幽霊の応答を引用する。

„Das glaube ich; das war keine Weisheit. So nah, als Ihnen ein fremder Mensch entgegenkommen kann, bin ich Ihnen schon von Natur aus. Das wissen Sie auch, wozu also die Wehmut? Sagen Sie, daß Sie Komödie spielen wollen, und ich gehe augenblicklich.“

(*Drucke zu Lebzeiten*, p. 37)

主人公の詰問に対して子供は、上の引用のように「そう思います。賢明ではありませんでした」 („Das glaube ich; das war keine Weisheit.“) と述べ、相手の指摘により、自分の非を認める。しかし、皮肉るかのように主人公の発言の一部を繰り返して、「見も知らぬ人があなたに近づくことができる程度には私は生来あなたの近くにいるのです。そんなことはあなたもご存知でしょう。何のためにそんな暗澹たる気持ちになっているのですか。ごまかそうしていると

言いなさいな。すぐにでも出ていきますから。」 („So nah, als Ihnen ein fremder Mensch entgegenkommen kann, bin ich Ihnen schon von Natur aus. Das wissen Sie auch, wozu also die Wehmut? Sagen Sie, daß Sie Komödie spielen wollen, und ich gehe augenblicklich.“) と切り返す。この最後の発話是一種の「脅し」と理解することもできるだろう。主人公は子供の来訪を喜んでいるが、子供の要求に従わなければ出ていくことになるということ、相手への不利益を述べているからである（「脅し」の定義については後述）。

### 2.3. 「脅し」の根拠

上の「脅し」に関する唐突発言「とにかく、あなたが私を脅したことは忘れません」 („Immerhin werde ich mir merken, daß Sie mir schon gedroht haben.“) の述語 *gedroht haben* に含まれる *drohen* とはそもそもどのような意味なのだろうか。『ドイツ語ユニバーサル辞典』 (*Deutsches Universalwörterbuch*<sup>8</sup>: 以下、DUW と略す) でその意味と用法を確認しておこう。

1. a) jmdm. durch Gesten od. emphatische, nachdrückliche Worte einzuschüchtern versuchen, damit er etw. nicht zu tun wagt: jmdm. mit dem Finger, mit der Faust, mit dem Stock d.; er hat mir gedroht; eine drohende Haltung einnehmen; b) darauf hinweisen, dass etw. für jmdn. Unangehemes geschehen wird, falls er sich nicht den Forderungen entsprechend verhält: [jmdm.] mit Entlassung d.; sie drohten damit, die Geiseln zu erschießen. (DUW, p. 400)

この辞書記述を見ると、a) と b) の二つの意味が載っている。それぞれについて簡単に説明しておく。a) ジェスチャーや力強く激しい言葉を使って、相手が何かをもうしないように、委縮させようとする、b) 誰かが要求に応じた振る舞いとらなかつた場合、その人物にとって不愉快なことが起こることになると指摘すること、というように説明されている。前者は激しい言動で相手を

<sup>8</sup> *Deutsches Universalwörterbuch* [4., neu bearbeitete u. erweiterte Auflage. Hrsg. von der Dudenredaktion, Mannheim, Leipzig, Wien, u. Zürich: Dudenverlag, 2001]

委縮させようとするのであり、後者は何らかの要求をしてそれに従わなかった場合、不都合なことが起こるということである。これまでの会話で、この説明のいずれかに該当する箇所があったであろうか。少なくとも、a)に当たる言語行動はなかったように思われる。だとするなら、b)で説明される言語行動が問題なのだろうか。これについて考えてみたい。

子供が常々嫌がっていたのは、子供に対する主人公の大げさなふるまいであった。たとえば、「自分は子供です。なぜ私にそれほどまで仰々しくするのでしょうか」 („Ich bin ein Kind; warum soviele Umstände mit mir machen?“) と問いかける (p. 36)。さらに、「私がただ言いたいのは、私があなたのことをとてもよく知っていることが私を守ることにはならず、むしろ、あなたを、私に何かをもっともらしく言う労力から解放させることになる、ということです」 („Ich wollte nur sagen: Daß ich Sie so gut kenne, schützt mich wenig, es enthebt Sie nur der Anstrengung, mir etwas vorzulügen.“) と発言し、自分に対して大げさにふるまう必要のないことを指摘する (p. 36)。続けて、「にもかかわらず、あなたは私にお愛想を言う。そんなことはやめてください、要求します、そんなことはやめてください」 („Trotzdem aber machen Sie mir Komplimente. Lassen Sie das, ich fordere Sie auf, lassen Sie das.“) と、気を遣ったお愛想を言うことをやめるよう要請している (p. 36)。これらの発言から、大げさに気遣いする態度をやめてほしいと子供は望んでいることがわかる。

では、この大げさに気遣いする態度が「脅し」と理解されたのであろうか。表面的には、そう解釈せざるをえないだろう。さらに次のような箇所がある (p. 37)。

「ごまかそうとしていると言いなさいな。すぐにでも出ていきますから。」

(„Sagen Sie, daß Sie Komödie spielen wollen, und ich gehe augenblicklich.“)

この「ごまかす」 („Komödie machen“) とは何をどうごまかそうとしているのか。これまでの文脈からすると、子供に対する大げさなふるまいのことを言っていると解釈することができそうである。とするなら、相手は子供なのに、遠慮した、気遣いのふるまいがその子供にとっては望ましいことではないので、

「脅し」として理解されることになるだろう。

本当にそうだろうか。もしそうだとすると、このようなことが「脅し」になるだろうか。

### 3. 幽霊の性

#### 3.1. 翻訳

ところで、この作品に登場する子供の幽霊の性別は男女どちらだろうか。この点については、先行研究では直接的には論じられてこなかったように思われる<sup>9</sup>。

ドイツ語の幽霊 (*Gespent*) という表現は子供 (*Kind*) という表現と同様に中性名詞である。この作品の幽霊との会話では、幽霊に対して *Sie* という二人称で呼んでいる。三人称では言及していない。ただし、後段の他の間借り人との会話では、幽霊が話題になっているので、「今、部屋に幽霊がいたんです」 („*jetzt habe ich ein Gespenst im Zimmer gehabt*“ (p. 38)) というように三人称で言及している。また、*Gespenster* というように複数形で言及されることもある。いずれにせよ、部屋にいた幽霊の性別は不明のままである。

日本語では自分のことを指示する自称詞は「僕」「俺」「あたし」「うち」など男女が区別できるものがある。では、この作品の和訳では幽霊は自分のことをどのように呼んでいるのだろうか。主人公に対して幽霊が自分は子供なので、気遣いは無用であることを訴える次の発話を取り上げ、その日本語訳をいくつか見てみよう (下線による強調は筆者)。

„Ich bin ein Kind; warum soviel Umstände mit mir machen?“

(*Drucke zu Lebzeiten*, p. 36)

---

<sup>9</sup> Lorenz (2008, p. 375)は、*„Die Erscheinung eines kleinen Kindes, ein tatsächlicher oder auch nur imaginierter Dialog und eine weibliche Geistererscheinung deuten verpasste oder ausgeschlagene Gelegenheiten an.“* というように、小さな子供の出現、事実もしくは単なる想像上の会話、女性の幽霊の出現に関する言及は見られるが、それらの関連については論じられていない。

「私は子供です。なぜそんなにいろいろ氣を遣われるのですか。」(高安國世訳『不仕合せ』『カフカ全集Ⅲ』新潮社, 1953, p. 37)

「僕は子供です。どうか、うっちゃっておいてください」(本野亨一訳『不幸であること』『ある流刑地の話』角川書店, 1963, p. 51)

「ぼくは子供なのでからね、どうしてそんなに形式ばった扱いをなさるのです。」(丸子修平訳『不幸であること』『決定版カフカ全集1』新潮社, 1992, p. 31)

「ぼくは子供です。どうしてぼくのこと、そんなにいろいろ氣を使うんです？」(吉田仙太郎訳『不幸であるということ』『カフカ 観察』高科書店, 1992, p. 92)

「ぼくは子供だしね。どうしてあれこれしたがるの？」(池内紀訳『不幸であること』『カフカ小説全集④変身ほか』白水社, 2001, p. 33)

「私は子供です。なぜそんなに大きさに私を扱うのですか？」(野村廣之訳『ふしあわせ』『フランツ・カフカ入門』三恵社, 2011, p. 41)

上の六つの翻訳では、「私」「僕」「ぼく」の3種の自称詞が見られた。「私」は男女どちらにも使えるので、性別は不明である。しかし、「僕」や「ぼく」は男性であることを示す。手元にある資料では、男性という理解が多いように思われる<sup>10</sup>。

では、英語ではどうなっているのだろうか。英語の一人称代名詞はIなので、会話からは性が判別できない。しかし、地の文で幽霊に言及する箇所がある。

<sup>10</sup> 安藤(1987)は、翻訳ではないが、主人公と会話している子供の幽霊について、『小さい幽霊』と最初言われながら、この『幽霊』はどうやらかなり大きい男の子であることが『私』との対話で明らかになる」と述べている (p. 109)。



幽霊が廊下から主人公の部屋に入ってくる次の場面である（下線による強調は筆者）。

Like a small ghost a child blew in from the pitch-dark corridor, where the lamp was not yet lit, and stood a-tiptoe on a floor board that quivered imperceptibly. At once dazzled by the twilight in my room she made to cover her face quickly with her hands, ...

(*Unhappiness* translated by Willa and Edwin Muir. *The Collected Short Stories of FRANZ KAFKA*, edited by Nahum N. Glatzer, Harmondsworth: Penguin, 1983, p. 391)

下線部のように *she* や *her* で言及されていることから、この英語訳では、子供の幽霊が女性として解釈されていることが分かる。ただし、その根拠はどこにあるのか不明である。

以上のことから、幽霊の性別については男性と女性の 2 種の解釈がありうるということになる。どちらの読みがより合理的であろうか。

### 3. 2. 非現実の仮定法

幽霊の性別に関しては、会話において「ドア閉め」のやり取りの最後の箇所でも話題になる。幽霊が自分は子供なので、気遣いは不要であると述べると、主人公は「もちろん、子供です。でも、まったく小さいというわけではありません。もう十分に大人です。あなたが女の子だったら、こんなふうに簡単に私と一つの部屋にいてはいけなんでしょう」 („Natürlich, ein Kind. Aber gar so klein sind Sie gar nicht. Sie sind schon ganz erwachsen. Wenn Sie ein Mädchen wären, dürften Sie sich nicht so einfach mit mir in einem Zimmer einsperren.“ p. 36) というように非現実の仮定法で女の子ではないという前提で話をしている。それに対して幽霊も、「それについては我々は心配する必要はありません」 („Darüber müssen wir uns keine Sorge machen.“ p. 36) と主人公の説明を請け合っている。

このようなやり取りから推量すると、幽霊は少なくとも女性ではないという

ことになる。しかしながら、幽霊本人は、自分は男の子であるからと明言しているわけではない。ということは、そのような心配は無用だとの同意表明の背景には、「女性」という観点からではなく、自分はまだ子供であるという観点から不要だと述べているとも考えられる。

しかし、その心配はないと子供の幽霊が発言する同じターンの最後で、「とにかく、あなたが私を脅したことは忘れません」と発言する。これは主人公の「女の子だったら」という発言にその理由をもとめることができるのではないだろうか。

ここでヒントとなるのは、暗がりでの会話という点である。幽霊は主人公のことをよく知っているが、どこでもいつでもというわけではないと述べ、とりわけ暗がりではと強調し、明かりをつけるようお願いしようとして、やめている。なぜだろうか。これは明るくなると、自分が女性であることが主人公に判明してしまうからではないだろうか。

### 3.3. 他の住人との幽霊談義

幽霊との会話の後、主人公は外出しようとして、階段を降りる際、他の間借り人と出会う。そして、幽霊談義をひとしきり行う。そして、会話の最後のほうで、次のやり取りとなる ([ ]は筆者による補足説明)。

„Ich habe aber gehört, daß man sie [Gespenster] auffüttern kann.“

„Da sind Sie gut berichtet. Das kann man. Aber wer wird das machen?“

„Warum nicht? Wenn es ein weibliches Gespenst ist z. B.“

(*Drucke zu Lebzeiten*, p. 39)

他の住人が「聞いたことがあるんですが、幽霊は育てることができるそうですね」(„Ich habe aber gehört, daß man sie [Gespenster] auffüttern kann.“)と主人公に話すと、「よくご存じで。できますよ。しかし、誰がそんなことしますかね」(„Da sind Sie gut berichtet. Das kann man. Aber wer wird das machen?“)と、興味のないかのような返答をする。それに対して住人は、「するでしょ。たとえば、それが女の幽霊ならば」(„Warum nicht? Wenn es ein weibliches Gespenst ist z. B.“)

と反論する。それに対しては、以下のようなやり取りが続く。

„Ach so“, sagte ich, „aber selbst dann steht es nicht dafür.“

Ich besann mich. Mein Bekannter war schon so hoch, daß er sich, um mich zu sehen, unter einer Wölbung des Treppenhauses vorbeugen mußte. „Aber trotzdem“, rief ich, „wenn Sie mir dort oben mein Gespenst wegnehmen, dann ist es zwischen uns aus, für immer.“

„Aber das war ja nur Spaß“, sagte er und zog den Kopf zurück.

(*Drucke zu Lebzeiten*, p. 39)

「ああ、そうですね。でもそうだとしてみなんにもなりません」(„Ach so, aber selbst dann steht es nicht dafür.“)と答えるが、しばし考える。そして、「いや、それでも、あなたが上で私の幽霊を捕まえたら、私たちの仲はおしまいになりますよ、永遠に」(„Aber trotzdem, wenn Sie mir dort oben mein Gespenst wegnehmen, dann ist es zwischen uns aus, für immer.“)というように、階段を上の方に上がっていった住人に叫ぶ。ということは、先ほどまで部屋で自分が話していた幽霊が、実は女性である可能性に気づかされたということにならないだろうか。

### 3.4. 「脅し」と解釈可能な発話

このように考えてくると、どの場面が「脅し」と理解されたのか見当がついてくるように思われる。

幽霊に対して、もう子供ではないと述べるくだりである。「もちろん、あなたは子供です。しかし、それほど小さいというわけではありません。もう十分に大人です。もしあなたが女の子だったら、そう簡単に私と一緒に一つの部屋に閉じこもってはいけませんよ」(„Natürlich, ein Kind. Aber gar so klein sind Sie nicht. Sie sind schon ganz erwachsen. Wenn Sie ein Mädchen wären, dürften Sie sich nicht so einfach mit mir in einem Zimmer einsperren.“)と述べている。非現実の接続法2式を用いているため、その前提として、主人公は幽霊のことを女性ではなく男性と見なしていると思われる。しかし、実際、幽霊が男性ではなく女性

だとしたら、この発言は、幽霊にとって自分は危険なところにおいて、女性であることが判明したら憂慮される事態に陥る可能性を示唆するものである。

自分が女性であることが露見しないように、この主人公の発言に対して、「それについては、心配はありません」ととりつくろう。そして、相手のことを知っていることが自分を守ることにはならないし、どこでもいつでも知っていることにはならないと述べ、とりわけこのような暗がりでは、と指摘する。その後、灯りをつけてもらおうとするが、結局やめる。これは灯りをつけることで、自分が女性であることが判明してしまうのを恐れ、それを避けるための発言だと理解できる。

このように考えることにより、主人公の女性に言及した発話が幽霊にとっては「脅し」と理解されたと解釈可能である。すなわち、幽霊は自分のことを子供だと言っているのに、相手の主人公は、もう十分に大人であるとの認識を表明し、女性だったら一つの部屋に一緒にいてはいけないと語っているからである。しかし、主人公にとってはどの場面のどの発言が「脅し」と理解されたのかわからないまま、いろいろ言い訳をするが、結局のところ、相手の言われるがまま、自分の「非」を認めてしまう。そして、その後の会話が険悪になっていく。

### 3.5. 自分の分身としての第二自我か本当の幽霊か

この幽霊の「正体」は何かという問題が残されている。井上(2003)は、この幽霊を「第二自我」と理解している。その根拠が「あなたの本性は私の本性なのです。私が本性に従って親切に行動するなら、あなたもそうする以外にありません」 („Ihre Natur ist meine, und wenn ich mich von Natur aus freundlich zu Ihnen verhalte, so dürfen auch Sie nicht anders.“) との発言で、幽霊が同一人物、つまり自分の分身であると理解していると推察される (cf. 井上 2003, pp. 53-54)。しかし、これは、実は主人公が勝手にそう思い込んでいるだけで、実際は、自分の分身ではなく、本当の幽霊であるという可能性を否定することはできないだろう。

そのように考えると、幽霊との会話の最後の不可解な部分が説明できそうで

ある。その箇所を引用しよう。先ほどの主人公が「あなたの本性は私の本性です。だから、私が本性によりあなたに対して親切にふるまうなら、あなたもそうする以外にありません」と述べた後のやりとりである。

„Ist das freundlich?“

„Ich rede von früher.“

„Wissen Sie, wie ich später sein werde?“

„Nichts weiß ich.“

(*Drucke zu Lebzeiten*, pp. 38-39)

幽霊は、主人公の発話について、「それが親切な態度ですか」(„Ist das freundlich?“)と尋ねると、主人公は「前からそのように語っています」(„Ich rede von früher.“)と応じる。それに対して、幽霊は「私が将来どうなるかご存知ですか」(„Wissen Sie, wie ich später sein werde?“)と問うと、「わかりません」(„Nichts weiß ich.“)と答える。この幽霊が、主人公に対して自分の将来の姿のことを尋ねる意図は、階段での他の間借り人とのやり取りと関連付けると理解できそうである。つまり、そこでは幽霊は育てることができるという話をしてしたが、主人公は「だとしても何の得にもならない」と返答する。しかし、住人が「もし幽霊が女性ならば」と条件づけすると、主人公は考えを改め、住人に幽霊を連れて行かないよう要求する。この時点で、幽霊が女性の可能性があるかと悟ったと解釈できる。

#### 4. おわりに

『不幸であること』における「脅し」に関する「唐突発言」自体については、従来注目されてこなかった。本稿では、その発言をめぐる背景を考察してきた。その結果、この幽霊が自分の分身ではなく、本当の幽霊であり、しかも女性である可能性があるという解釈を行うことにより、合理的にこの「脅し」を指摘する発言が理解できることがわかった。しかし、まだ十分にこの作品の構造分

析がなされたとは言えない。今後は、まだ解明されていない細かな矛盾点を含めて会話の分析を深めていく必要がある。

(金沢大学人間社会研究域経済学経営学系)

## 文献

- 安藤秀國 (1987). 「カフカにおける『虚構の語り手』の機能——短篇集『観察』の研究——」. 『愛媛大学法文学部論集 文学科編』第 20 号, 95-113.
- Beißner, Friedrich. (1952). *Der Erzähler Franz Kafka*. Stuttgart: Kohlhammer (粉川哲夫編訳 『物語作者フランツ・カフカ』せりか書房, 1976) .
- Hess-Lüttich, Ernest (1979). „Kafkaeske Konversation. Ein Versuch, K.s Mißverstehen zu verstehen.“ W. Vandeweghe & M.v.d. Velde (Hgg.): *Bedeutung, Sprechakte und Texte. Akten des 13. Linguistischen Kolloquiums*, Gent 1978, Band 2, Tübingen: Niemeyer, 362-370.
- 井上正篤 (2003). 『カフカ彷徨』 同学社.
- 古庄紋十郎 (1978). 『『観察』論』. 『法政大学短期大学部研究年報』第 12 号, 25-45.
- Krusche, Dietrich (1974). *Kafka und Kafka-Deutung*. München: C. Hanser.
- Lorenz, Dagmar C. (2008). „Kafka und gender.“ Bettina von Jagow und Oliver Jahraus (Hgg.): *Kafka-Handbuch Leben – Werk – Wirkung*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 371-384.
- 三谷研爾 (1986). 「カフカの『城』における登場人物の発話の機能」. 阪神ドイツ文学会 『ドイツ文学論攷』 XXVIII, 69-87.
- 西嶋義憲 (1990). 「カフカのテキスト *Die Bäume* を理解するために——テキストの多層性について——」. 「かいろす」同人 『かいろす』第 28 号, 31-44.
- 西嶋義憲 (2000). 「カフカ作品における対話の『歪み』——*Von den Gleichnissen* のテキスト言語学的分析——」. 日本独文学会中国四国支部 『ドイツ文学論集』第 33 号, 5-14.
- 西嶋義憲 (2001a). 「カフカ作品における次元の転換——カフカのある『断片』を

- 例にして——」. 『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』第21号, 81-93.
- 西嶋義憲 (2001b). 「カフカのテキスト *Kinder auf der Landstraße* における対話の分析——繰り返しの技法——」. 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』第5号, 161-174.
- 西嶋義憲 (2004). 「『お見通し』発言による対話展開の原理——カフカの対話断片テキストを例にして——」. 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』第8号, 155-168.
- 西嶋義憲 (2016). 『カフカと「お見通し発言」——「越境」する発話の機能——』. 鳥影社.
- Nishijima, Yohinori (2005). „Durchschauende Äußerung im Dialog von Kafkas Werken.“ 日本文体論学会『文体論研究』51, 13-24.
- Nishijima, Yoshinori (2015). „Ignorance of Epistemological Distance: Rhetorical Use of Non-Evidentials in the Work of Franz Kafka.“ Barbara Sonnenhauser & Anastasia Meermann (eds.) *Distance in Language: Grounding a Metaphor*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 167-186.
- Nishijima, Yoshinori (2019). „<Seeing-through utterance> as Wordplay: Interpersonal Games in Fictional Conversation of Franz Kafka.“ 金沢大学国際基幹教育院外国語教育系『言語文化論叢』第23号, 109-128.
- Stanzel, Franz K. (1985). *Theorie des Erzählens*. 3. durchges. Auf., Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.